焼き塩

試し読み

会所騒動

「一体なにが起こっている……？」
薬種問屋仲間の行事を務める浪江屋は、驚きを隠せず、思わず浮かんだ言葉をそのままぼそりと呟いた。
「差支えがあるようならば、その方らでまとめて申し出よ」
月番の町奉行がそう重々しく言うと、座敷を去る。一応礼をしたものの、男の頭の中はグルグルと回る疑問ばかりで、役人に座敷を出るように促されて、為されるがままに雲を踏むような足取りで奉行所を出たのだった。
そして、どこをどう歩いたかも覚えぬ内に、商売仲間である蒔野屋の店先に立っていた。
「浪江屋の旦那じゃありませんか？」
川沿いに作られた船着き場で、薬種が入った櫃の荷揚げを監督していた手代が、ぼんやりとした様子の浪江屋に気付いて、声を掛ける。
「あ、ああ……」
呼びかけられたのは判った。だから何かを言おうとするが、言葉にならない。そんな浪江屋の様子を訝しく思い、手代はすぐに小僧を手招きした。
「三吉、浪江屋さんを座敷にご案内して、旦那様に浪江屋さんがいらっしゃったとお伝えしなさい。帰りに台所でお客様にお茶を出すように頼むんですよ」
三吉と呼ばれた小僧が、あい、とも、はい、ともつかない惚けた返事をして、浪江屋の手を取り店の奥へ連れていく。浪江屋は小僧に手を引かれるまま、入口を潜った。
「やれやれ。若旦那が首を突っ込まなければいいが……」
手代はそう呟くと、嫌な想像を振り切るように首をぶるぶると振った。

「浪江屋さん、浪江屋さん」
肩を揺さぶられて、浪江屋ははっと我に返った。一瞬、自分がどこにいるのか判らず、目をぱちくりと瞬かせる。
「心ここに在らず、と言う風情ですが、大丈夫ですか？」
「……蒔野屋さん……」
ぼんやりと目の前にいる老年の男の名を呼ぶ。長年の付き合いの薬種問屋の旦那である。それを認識すると、浪江屋はうわっ！　と声を上げた。
「わぁ、びっくりした」
もう一つ、蒔野屋の旦那の声ではない、言葉の割に驚いた風でもないのんびりとした若い声がして、浪江屋はその声の方を向く。
蒔野屋の若いころにそっくりの顔立ちをした男が、耳を塞いだ格好をして面白がっている顔をしていた。
「浪江屋さん、一体どうなすったんです？」
「これ、お前は黙って居なさい」
蒔野屋が息子を窘めるが、若旦那の方はまあまあ、と手を振って意にも介さない。

「いやぁ、小僧が何やらバタバタ走り回っているから、なにやらおもしろ……、心配になってね。とっ捕まえて聞いてみたら、浪江屋の大旦那が呆けちまってるって言うじゃないですか。カミナリ親爺で通った大旦那が呆けたなんて、滅多にないでしょう？　サテは、女郎に変化（へんげ）した狸にでも化かされたかと思って」

見に来ちゃった、と悪戯っぽく若旦那が笑う。

「カミナリ親爺は余計だ」

浪江屋は若旦那の言葉に我を取り戻して、厳めしい顔でそう言った。そんな憎まれ口を聞いたことでさらに目が覚めたのか、ふと辺りを見回して、見慣れた座敷であることにも意識が行く。ここには、何年も、いや何十年も、何回も来たことがある。開け放した障子からは、露地風の庭が見える。チチ、チチ、と鳥の鳴き声と、庭木を揺らす風の音がした。嗅ぎなれた襖と畳の香り。ほう、と落ち着いた溜め息が出た。

「おや、剣呑剣呑。で、浪江屋のカミ……、大旦那がボケるなんて、何があったんです？」

自分で持ってきたらしい普段使いの湯呑みから、ずずっと茶を啜って若旦那が尋ねる。そんな若旦那を、父親が諌めようと口を開くが、結局彼自身も話の続きが知りたかったようで、口を噤んだ。

「お奉行様からお呼び出しがありましてな」

浪江屋も自分の前に茶が出されているのに気が付き、一口飲むと小さく溜め息を吐いてそう言った。

「いやだなぁ、大旦那。なんぞ悪さでもしたんですか？」

「だれが悪さなぞするかッ、子供じゃあるまいし！　そうではない。そうではないのだ……」

浪江屋の旦那は若旦那の言葉に噛みついたが、呼び出されたワケを言う段になって、もにょもにょと言葉が尻すぼみになった。

「んん？　聞こえませんよ？」

若旦那が耳に手を当てる。若旦那が茶化したのが良かったのか、怒鳴って力が抜けたのか。浪江屋はすぅ、と一つ息を吸うと覚悟を決めたように口を開いた。

「和薬種改会所（わやくしゅあらためかいしょ）の歎願があったそうだ。そこでお奉行様が差支えがあるかと仰せになられましてな」

「和薬種改会所……？」

若旦那が首をかしげる。

「和薬種というのは、この日の本で獲れた薬の素になる葉、花、根、実のことで……」

「ンなこたァ判っていますよ、お父つぁん。そうじゃなくて、改会所の方ですよ」

若旦那が、うンもぅ、と言いながら父親を遮る。父親は鼻白んだが、息子への教育の機会と思ったのか、一つ咳（しわぶき）をして説明を改める。

「薬種を各地から集め、改める。つまり、その真贋、品を見極める所です。そうして、改印というのを出して、荷主買い主に売買をしてよろしい、と……」

「ああ、つまりはお墨付き、と言うわけですね」

自分から聞いておいて、若旦那はへぇ、と全く興味がなさそうな返答をした。

「それにしても、会所などバカバカしい」
同時に父親である蒔野屋の旦那も即座に切り捨てる。息子のやる気のない態度に、折角教えてやったのにと言う苛立ちが混ざっていなくもない。
「ほう、何故です？」
父親の態度が意外だったのか、若旦那がちょっと興味を取り戻したように尋ねて来た。
「お前は何故だと思うんです？」
若旦那が尋ねたのに対して、父が問い返す。
「えぇ～？　問い言に問い言で返さないでくださいよぅ」
「フラフラと出歩いてばかりいる脛かじりの、口達者な所も偶には聞こうじゃありませんか」
「そんな言い方されたら、余計に答えたくなくなると思んですけれど」
「いいから、いいから」
父である蒔野屋がいなすのを、ちょっと不満そうに口を尖らせ、それでも、うーんと言いながら若旦那は宙を見上げて暫し考える。
「改会所と言うからには……。ああ、荷を一か所に集めるのが難儀でしょうかねぇ。後は、真贋や品に関して、会所の加減で全てが決まってしまうからでしょうか」
案外まっとうな若旦那の答えに、浪江屋も父も、うんうんと頷いた。その父親の目尻に涙が光っていたのを、浪江屋は黙って己の胸に仕舞うことにする。お互い跡取りには苦労するなぁ、と思いながら。
「江戸にしろ、大坂にするにしろ、とにかく荷を一旦どこかへ集中させるのは無理です。北前船、菱垣廻船、五街道だけじゃない。今や薬種の売買は荷運びの手段、距離の長短を問わず、日の本全てで行われていますからね。その荷の流れを今更変えるなど到底出来るものではありません。しかも、改会所を作ると言うことは、主要な問屋だけが相手で良いと言う話でもないでしょう」
蒔野屋の旦那が言って、茶で口を湿す。
「さらに言えば、まず今の世で、それだけの荷を置いておく場所がない。また、荷をわざわざ会所に運ぶと言うその面倒を嫌って、会所どころか、今取引している問屋以外に乗り換えてしまう者も出るでしょう。それに、店を構えていないような仲買や問屋ともつかない商売人たちが立ち行かなくなってしまう」
旦那の言葉に、浪江屋も付け加える。
「歎願では、改め料からお上へ納める冥加金、そして諸々の掛かりを賄うとあったそうだ」
「真贋、品が担保されるのは良いことのように思えますがね。それこそ、ちゃんと目利きがやるんでしょう？」
ふむ、と話を真面目に聞いているのか聞いていないのか判らないような口調で若旦那が答える。
「勿論薬種商いに関わる者全てで会所の差配や改めの仕法をどうするか、考えていかなければなりません。そのためにも、誰が参加するかでだいぶ変わりましょうよ」
蒔野屋が釘をさす。
「ま、そりゃァそうですね」

＊お願いとおことわり＊

本PDFは試し読みのために作成いたしました。

刊行年の古いものは、当時と現在の製作環境の違いにより、実際の頒布物の見た目と異なる場合がございます。

また、試し読みでは、頒布物の全作品をサンプルにしている場合と、当時の原稿が手元にないなどの事情で、一部作品のみサンプルとしている場合がございますので、あらかじめご了承くださいませ。

なお、有償無償を問わず、本PDFの内容を、ご自分の作成物として一部、または全てを再配布する、あるいは本PDFを有償にて再配布する行為はご遠慮くださいますようお願いいたします。

作成：寝床屋
URL: http://wwbtd.mods.jp/nedocoya/
Mail: nedocoya@gmail.com
Twitter: @nedocoya4pr